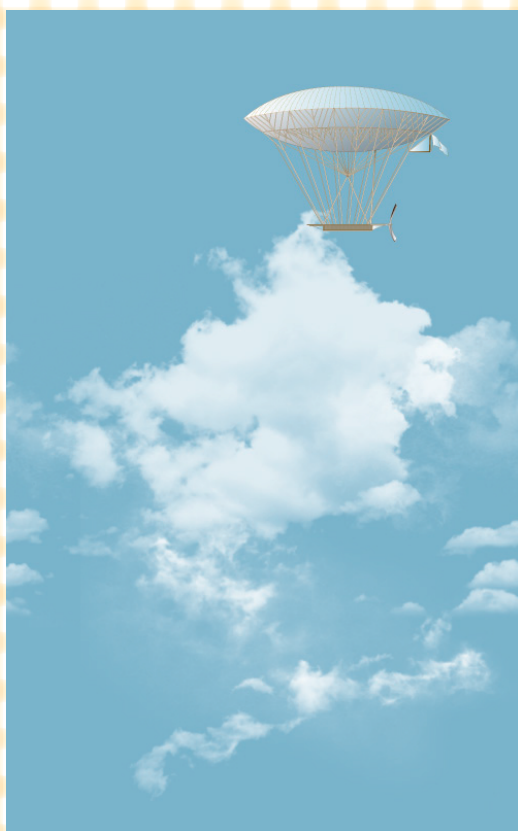


ふおーらむ

第12号



目 次

巻頭特集

第 17 回「図書館サポートフォーラム賞」表彰式 …………… 2

挨拶：山崎久道 氏

表彰講評：水谷長志 氏

受賞者挨拶

漆原宏 氏

小川千代子 氏

戸塚隆哉 氏

文集

山内明子「俳句八句」…………… 10

末吉哲郎「川柳・戦時中」…………… 11

小川千代子「『月報』とその取扱い―藤女子大学がスゴイ！理由」…… 12

小泉徹「『多死社会』時代の寄贈本作業」…………… 14

戸塚隆哉「ドキュメンテーションアーカイブの設置を至急に」………… 15

水谷長志「東京国立近代美術館の能

絵画と工芸と映画フィルムと」…………… 17

編集後記

第17回図書館サポーターフォーラム賞授賞式

於／2015年4月20日(月)

喜山倶楽部光琳の間(日本教育会館内9階)

国の子どもたち、中には教科書以外の本は見たことがないというような国の子どもたちへの文庫活動をなされた方がいらつしやいます。そういった国際的な図書館や読者への支援をした方を顕彰するというのが、第三の柱となっています。

大体この専門性、社会的意義、国際貢献といった三つの観点から活動をされている方に対して、毎年表彰させていただくことでこの賞は続いてきているわけです。このコンセプトは第1回目の時からほとんど変わってきていないと思います。

表彰選考の内容についてはこの後水谷表彰委員長より詳細をご説明いただきますので、私からは省略させていただきます。
どうもありがとうございました。

2. 表彰講評

水谷長志氏

(表彰委員会委員長)

図書館サポーターフォーラム表彰委員長をしております東京国立近代美術館の水谷と申します。よろしく願ひいたします。

1. 挨拶

山崎久道氏

(図書館サポーターフォーラム代表幹事)

図書館サポーターフォーラムの代表幹事を務めさせていただいております山崎久道と申します。

図書館サポーターフォーラム賞も今回17回目を迎えることになりました。この賞は、本日会場に初代の代表幹事を務められた末吉哲郎さんがいらつしやっていますが、図書館サポーターフォーラムが様々な図書館に関わる活動、とくに個人を顕彰することを目的に始めて、今に続いているものです。

この賞のコンセプトは、大体三点に要約できるかと思ひます。

1つ目は、図書館員の日々の仕事に関わる専門性を活かしたユニークな業績や地道な活動な

どがあります。そういった方々の地道な活動に光を当ててその成果を顕彰させていただき、応援していこうじゃないかということが、第一の柱となっています。

2つ目は、図書館の価値というか、非常に大事なものであるということが日本の社会において十分に理解されているわけではありません。図書館には予算がつきにくいとか、選挙の票につながりにくいとかいろいろな理由を挙げる方がおられますが、皆さんご案内のとおり図書館は民主主義における情報に関わる社会的施設です。日本が本来の意味で先進国あるいは民主主義国たろうとすればそういった社会基盤を大事にするのは当然のことです。そういった図書館の社会的意義に関わる活動をしたり、世の中にアピールする活動をされている方を顕彰しようというのが、第二の柱となっています。

3つ目は、国際的な図書館に関わる活動、例えば発展途上国における図書館支援とか、途上

早速ですが、第17回図書館サポートフォーラム賞の表彰結果について、ご報告いたします。

今回は、図書館サポートフォーラムの会員および事務局より、個人8名、団体2件の10の表彰候補が推薦されました。

この数は昨年の9件よりも1件多い推薦数でありまして、このところ引き続いて、表彰候補の数は上向いております。

今年もまた、いずれの個人、団体についても、図書館員および図書館の外から図書館をサポートされ、図書館活動を推進するお仕事をされていて、いずれも高い業績と評価をすでにお持ちの方々でありました。

選考は3月17日、大森の日外アソシエーツにおいて15名の出席幹事による投票および2名の不在幹事の通信投票によることとなりました。

出席・不在のあわせて17名の幹事による投票が行われ、その結果、この度の第17回図書館サポートフォーラム賞は漆原宏様、小川千代子様、戸塚隆哉様のお三人様が受賞されることになりました。

では、順に第17回図書館サポートフォーラム賞の表彰理由について述べさせていただきます。

まず最初に、写真家・漆原宏様の表彰理由を読み上げます。

東京証券取引所勤務のかたわら東京総合写真

専門学校を卒業、写真雑誌(株) 研光社勤務

の後、1974年にフリーカメラマンとなる。

1983年に『地域に育つ暮らしの中の図書館』(ほるぷ出版)を出され、その後も日本図書館

協会の『図書館雑誌』に「フォト・ギャラリー」

を連載、2013年には同協会から『ぼくは、

図書館がすき―漆原宏写真集』を刊行された。

氏は一貫して利用者、職員、そしてさまざまな

図書館への関与者の姿を図書館の空間の中に探

し、発見しながら「図書館の風景」をいきいき

としたイメージとして記録されてきた。おそら

くは後世の日本の図書館(史)研究者は、氏が

残し定着させたイメージをもとに20から21世紀

の日本の図書館の姿を理解し、再構築するに違

いない。その他に代え難き功績は、図書館サポ

ートフォーラム賞にふさわしく、高く評価して表

彰するものである。

ハンガリー出身の写真家アンドレ・ケルテ

ス(1894-1985)の写真集に『読む時間(On

Reading)』(Penguin Books 1982, 創元社2013)

があります。読書することの幸いと不思議の情

景を切り取って提示すること写真集に魅惑され

た経験を持つ読書人、図書館人も多いことでは

しょう。ここに一冊持ってきた新書『藤田嗣治

る、この写真もケルテスの写真です。

図書館が周年事業で刊行する年史あるいは毎

年の日本図書館協会建築賞の記事、あるいは『新

建築』など建築雑誌にも多くの図書館の様子・

空間を伝える写真は多いのですが、大体が無入

の図書館建築の写真です。生きた「資料」と「利

用者」と「図書館員」が交錯し、交響しあう様

を伝える写真は、極めて稀であります、本当に

少ないです。

おそらくは20世紀後半から今日、そして近い

将来までのスパンで、広く日本の図書館の風景

を後世に伝えるものは、漆原氏の写真のほかに

は無いのではないのでしょうか。そして同時代を

共にする図書館人は、漆原氏の写真に出会うこ

とによって、ケルテスの写真から得るのと同じ、

読書と図書館の幸いと不思議に共感し、さらに

は同業者による本と図書館へのさまざまなアイ

ディアと工夫をそこに見出し、借用しているの

に違いなのです。心ある図書館員であれば。

このように漆原氏の長年にわたる写真は、読

書と図書館をめぐる、同時代と未来に向け

て、ほかに代えがたい歴史的文化的遺産をもた

らしているのです。その功績はまことに図書館

サポートフォーラム賞にふさわしいものと考え

ています。

昨年、2014年の全国図書館大会の第16分

科会「図書館を語る」は、漆原さんの写真集を

見ながら、分科会をとにした23人全員が図書館への想いを語り合ったということでした。このような効用も漆原さんの写真にはあるのです。

次いで、国際資料研究所代表／藤女子大学教授の小川千代子氏の表彰理由を読み上げます。

東京大学百年史編集室から国立公文書館で勤務される中で、1989年に米国・認定アーキビスト・アカデミー (Academy of Certified Archivists) 資格を得て、1993年からは独立してDJI (Documenting Japan International: 国際資料研究所) を設立。以後、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会、記録管理学会、ICA (International Council of Archives: 国際文書館評議会) などの学協会での諸活動ならびに藤女子大学ほかでの教鞭など、近年の日本におけるアーカイブズ事業のほばあらゆる方面において国際的、先導的かつ啓蒙的な活動を展開されてきた氏の業績は、図書館界に対しても多大な恩恵をもたらしており、その功績は図書館サポートフォーラム賞にふさわしく、高く評価して表彰するものである。

いま表彰の理由として「氏の業績は、図書館界に対しても多大な恩恵をもたらしており」と

述べたのでありますが、MLA連携の言葉もあります。事実はすでに「連携」から「融合」へとさらに進化を遂げているという声も聞かれます。とは言え、MLAの個々の立場からするとそのコレクションへの対し方、職業観、あるいは倫理観、もつと碎けて言えばある種の「作法」にはそれぞれ固有のものがあり、容易には連携したり、ましてや融合することはないような気もしています。図書館員気質をライブラリアンシップ、学芸員気質をキュレーターシップなどと言うのであれば、そのシップこそがそれぞれの仕事の「矜持」であり、「作法」なのだと思います。

アーカイブの世界ではアーキビストシップと言うのでしょうか、あまり聞いたことがないの、ある人にお尋ねしたら、「アーカイヴィイ・archivy」ではないかとお答えいただいたことがあります。アメリカのアーキビスト協会であるSAA (Society of American Archivists) のオンライン・グロースリーにもある言葉ですが、「The discipline of archives*」とあるので、ある意味近いのかもしれませんが。私としてはMLAの異なるシップが、互いに異なることを前提にしながら、互いを認知、承認、尊敬して「連携」を図るのが望ましいのではないかと考えておりまして、2011年のINFOSTAの『情報科学と技術』に、「MLA連携のフィロソ

フィー」と言う題目でその考えをまとめたことがあります。

さて、小川千代子様に話を戻します。氏は、現在、記録管理学会会長でもあり、多方面でのご活躍は本日ご来場のみなさまのよく知るところであって、さらに私が付け加える事もないのでありますが、とても強い印象を持ったのは、それこそ小川様の「アーカイヴィイ」を鮮烈に記憶したのが、この『アーカイブを学ぶ 東京大学大学院講義録「アーカイブの世界」』（岩田書店、2007）の末尾に小川様が書かれた「残すということ」という一文です。7章からなるのですが、いずれも強いメッセージ性のある章題でありますので、ご紹介したいと思います。

始まりが、■「残す」はチカラの反映、続けて、■記録を「残す」人間／■残せるか否か、これが問題／■「残す」は世界共通の関心事／■利用提供は切り離す／■残すということ、最後は、■文化のモノサシ、となっております。

ライブラリアンシップの反映として、図書館員は「残す」ことにここまで明快直截には言えないくらいもありますが、それこそシップの差異に起因するのではないのでしょうか。

その差異を越えて「連携」するヒントが、小川さんのアーキビストとしてのシップの表出の力強さにあるように思われてなりません。

最後に、元・情報科学技術協会（INFOS TA）の戸塚隆哉氏の表彰理由を読み上げます。

UDC (Universal Decimal Classification: 国際十進分類法)は、ベルギーのポール・オトレ、アンリ・ラ・フォンテーヌが19世紀の末に、「本」を書架に分類配架するために開発されたデュイのDCを克服し、「文献」を分類するツールとして開発され、特に科学技術系専門図書館において多く採用されたものである。日本でも、氏が事務局をされていた2つの継続する協会において日本語版が維持されてきたが、2004年の同協会のUDC事業からの撤退後も、UDCコンソーシアムにおける日本側アドバイザーに就任するとともに、2002年発行のUDC CD-ROM版以来途絶えていた日本語版（要約版）を10年ぶりに作成・公開に尽くされた。ともすれば今日、検索において看過され、忘れられがちな分類の意義を、UDCの日本語化を通じて再考を促す氏の業績は、あらためて高く評価されるべきものであり、図書館サポートフォーラム賞として表彰するものである。

昔々、検索（サーチ）ではなく、情報検索（インフォメーション・リトリバル）を学んでいたとき、文献検索に必要な知識として、DCはDCでも、UDCの知識が必要なることを教えら

れましたし、^{サブジェクト・ヘディング コントロールド・ボキャブラリ}件名、^{リファレンス}統制語彙、シリーズなどなど、カタロギング・ルール以外にも多様でなかなか手強いツールを駆使する専門図書館員、サーチャーとかインフォ・プロといまでは言うのかもしれませんが、そういうプロフェッショナルな風貌のイメージとUDCは離れ難く記憶に残っています。

確か、INFOSTAの『情報の科学と技術』の前誌であった『ドクメンテーション研究』の個々の論文のタイトル部分には、「…」で繋がれたUDCが麗々しく印字されていて、さすがUDCの旗振り協会の雑誌と尊敬の念を抱いていたものでした。それがいつの間にか情報科学技術協会へと移行して、その「…」で繋がれた魔法の文字列もいつの間にか消えていて、一応、私もINFOSTAの会員なのですが、迂闊にもかつての旗振り協会がUDC事業から撤退したとは、まったく意識の埒外にありました。この事態に対して、誌面で議論があったのかも詳らかにしませんでした。

あらためてバックナンバーをひっくり返しますと、2004年の9月の巻末誌面広告には、『UDC中間版第3版』がありますが、次号の10月からはそれも消えて、11月には「当協会はUDC協会の出版物の取り扱いを終了しました。」のページがあり、「2002年度の通常総会でUDC協会を退会することが決議された」

と記されていました。誌面の論文表題からUDCの文字列が消えたのは、もっと後の2009年1月号からでした。

このように日本では役目を終えたかのUDCの、その日本語要約版を維持しようとする戸塚氏の功績を、推薦者は、「単にUDCの国内普及への尽力にとどまらず、知識の体系化における十進分類表の存在意義の高揚に大きく寄与したと言っても過言ではない」と述べて、結果、多くの票を得ることとなりました。

昨年、私は、ベルギーに行く機会がありました。まさにオトレの学んだルーヴァン大学で日本資料専門家欧州協会(EAJRS)のカンファレンスに参加するためでした。UDCはともかく、ドキュメンテーションの活動がこの地から始まったことに深い感銘を覚えたのですが、この大学の図書館は、ヴォルフガング・シヴェルブシュの『図書館炎上―二つの世界大戦とルーヴァン大学図書館』（叢書・ユニベルシタス）の通り、図書館はプロイセンとナチスによって二度焼け落ちたのでありました。

前の表彰者の小川さんの「残すということ」の意味をあらためて振りかえる機会ともなったのでありました。

第17回を迎える図書館サポートフォーラム賞も、この賞の三つの柱にかなって、長年の研鑽

と国際性、そして図書館のあることの意義の発露顕現をよく示すお三方に授賞いただき、選考委員長として、ことのほか嬉しく思っております。

以上をもちまして、簡単ではございますが、今回の図書館サポーターフォーラム賞の表彰者のご紹介とさせていただきます。ご静聴ありがとうございます。

<http://www2.archivists.org/glossary/terms/a/archiv>

3. 受賞者挨拶

漆原宏氏

(写真家)

雨の中、またお忙しい中ありがとうございます。この度の栄に預かり感謝申し上げます。

第17回図書館サポーターフォーラム表彰の理由を読んで、なんと嬉しい言葉、なんと勇気づけてくれた言葉を受けたことでしょう。

幼少期、私は今で云う「アキバ通い」が日課でした。無論、小遣いなどなかったですから、ジャンク屋で人の動きを見ているのが好きな子

で、日々満足していました。歳経て蔵工（東京都立蔵前工業高等学校）の電力科へ入ったのも不思議ではないでしょう。職業にカメラを握るのも、社会を見ていて工具がカメラに変わった気がします。被写体には、自然に手を加える仕事を好み、物を産み出す人に引かれます。図書館の仕事も建物より職員の仕事ぶりや利用する住民にカメラが向きます。

私が図書館を撮りだしたのは、日本人が真剣に日本の行く末を考えて行動し出した、60年安保と云われた後で、図書館員が日本の図書館のあるべき姿を考え出し、具体化し、それなりに変化を確信した頃で、記事と写真で実体を世に問う行動に出たお付き合いを引き受けた事に始まります。

職員は皆、活き活きとして地域住民も意識的に働きかけていました。この時代、千葉治氏と



の出会いが大きく彼から全国の図書館人との出会いが始まりました。図書館も移動図書館も、地域住民で埋まり、花が咲いた様でした。今と比べるのも可笑しいですが、中で笑っている自分がいました。

千葉館長以下職員の動きは、傍から見ても羨ましいほど地域住民の生活や遊び、そして自治体住民の日常生活に欠かせない資料を一連の書架に集合させ、手に取りやすい工夫がほどこされ、親子が安心して利用可能にいたしました。図書館現場の撮影を依頼された時、私が描いた写真は「事実を有りのままに映し出す」とことでした。墨田区立八広図書館の初期は、格好の被写体が連日繰り広げられていました。10年後『地域に育つくらしの中の図書館―漆原宏写真集』（ほるぷ出版）は、全国の図書館人に詳しい千葉館長に紹介して頂きながら撮り溜めた写真で創った冊子で、墨田区立八広図書館のカットが多いのです。

1980年～2000年までの写真は、パネル化され、全国の図書館と図書館空白町村で展示されています。昨年末から高松市にある香川県子ども文庫連絡会で管理・貸出されております。既に25カ所程で展示されています。

月日は瞬く間に過ぎ、1990年に「生涯学習振興法」が国会で成立すると、機構の改革が静かに浸透し始めて、複合施設を設置・運営す

る自治体から民間委託化が始まりました。

今年、すでに四半世紀になります。東京を含め各都市の公共図書館は、ほとんど民間委託か指定管理になりました。好きな職場に就職しても非正規か労働条件が悪いのが実態です。職員は、利用者マニュアルが科せられ、利用者との会話すら遠慮しなければならぬし、カウンターにたむろする子どもたちすら見かけることが少なくなりました。返却は、機械化され、質問すら出来かねる始末。機械をのぞき見る施設を設けている図書館すらあります。

創業・起業も良いですが、自治体行政の一機関なら、駅前のレストラン街化を阻止し、街の賑わいと住民生活の文化を今一度、取り戻す工夫を創り出す社会を期待したいです。

終わりに、この大きなご褒美も全国の図書館と図書館員のご協力があつてできましたことで、茲に心よりお礼申し上げます。どうも有り難うございます。

小川千代子氏

(国際資料研究所代表／藤女子大学教授)

図書館サポートフォーラム賞受賞に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

3月、表彰のお知らせをいただいたときは、

この表彰を受けることになって、とてもうれしい、素直にそう思いました。ちょうど、DJ Iレポート、つまり国際資料研究所報のNo. 100を3月15日付で発行したのと表彰のご連絡がほぼ同時期であったことも手伝い、これまでの仕事が一段落という感じもありました。表彰理由で、「近年の日本におけるアーカイブズ事業のほばあらゆる方面において国際的、先導的かつ啓蒙的な活動を展開されてきた」とご紹介にあずかりましたが、言い換えれば他にこの分野で活動しようとする人がほとんどいなかったということなのではないかと思えます。

思い返せばアーカイブ、アーカイブズは歴史学研究の補助学であるといわれ、びっくり



したり憤慨したりしたのは東大百年史の時代、1980年代中期でした。結構悔しいと思ったので、心の中で「いつか、その言葉をひっこめてもらおう」と決心した記憶があります。でも、それが正確にいつだったのか、記録していないからわかりません。

その後1987年に国立公文書館の職員となり、ICA国際文書館評議会（国際公文書館会議、国際アーカイブズ評議会などの訳もありま

す）を中心とした国際関係を担当しました。1992年6月に国立公文書館を退職しました。フルタイムでの国立公文書館勤務の中での子育てに問題を感じたからでした。退職後は、1985年以来続けてきていた全史料協に活動の場を得ることができました。ICAの活動に参画するに当たり、全史料協の国際担当の立場を与えられました。1992年から2008年まで16年間、全史料協の立場でアーカイブの国際世界をウォッチしてきました。

この間、1995年1月、阪神淡路大震災が起きました。この地震が文書館にどんな被害をもたらしたのかを知りたくなり、現地に出かけました。なぎ倒された書架とそこから落下した資料が、文書館の被害そのものでした。ある美術館では展示作品が倒れて壊れたということも聞きました。地域の古文書の被災状況を調べている人がいる一方、古物商が被災現場で資料を

買い漁っていることも知りました。こうした現地の様子を他の人にも知らせたいと思い、ワープロで現地レポートを作りながら、ふと「これは新聞みたいにタイトルをつけたらどうか。隔月刊なら、しばらくしたらまた書きたいことも見えてくるだろう。」と極めて安易な気持ちで『DJIバイマンスリーレポート』準備号No. 1、というタイトルをつけました。国際資料研究所の活動の発信が、この時から始まりました。その後、タイトルから「バイマンスリー」を削除し季刊発行のアーカイブ専門誌、DJIレポートということで今日に至っています。今100号全体の内容を振り返ると、アーカイブ界の話題提供のツールをめざして続けてきたという気がします。文書基本法を作れ、記録管理院を整備せよ、といった政治向きのカタイ話題から、ノミの市で買ってしまったアーカイブの箱のお話、時には猫の計報に至るまで、何でもアリの紙面構成です。

そのDJIレポートNo. 100を今日はお手元に配らせていただきました。

実のところ、DJIレポートは発行することに追われているため、あまり振り返ったことがありません。ところが、今日はこの受賞理由として「近年の日本におけるアーカイブズ事業のほぼあらゆる方面において国際的、先導的かつ啓蒙的な活動を展開」したことを挙げていた

いただきましたので、DJIレポートを用いてこれを少しは証明できるかもしれないと思い、目録を眺めてみました。わかったのは、全部で93回発行されたこと、電子版になったり、時々紙媒体でも発行されていたりすることなどです。本日配布の100号は、奥付に⑧のマークをつけました。ホームページに掲載済の電子版(PDF)と区別するためです。(DJIレポートはバックナンバーの大半も国際資料研究所のホームページに掲載しています。)

また、電子版も含め、No. 5からNo. 90ごろまでは企業広告掲載で応援をいただいていたいました。本日ご列席の国際マイクログラフ工業社様はじめ関係企業の皆様のご厚意によるものです。

最後に、2冊の本のことをお話ししてご挨拶を締めくりたいと思います。どちらも大阪大学出版会にお世話になりました。一つは2009年以来取り組んできたUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)のアーカイブ資料整理の報告を兼ねた、『アーカイブ・ボランティア』で昨年6月発行されました。これは文字通りアーカイブのためのボランティア作業を紹介する本で、私は国連のアーカイブ資料や、チェルノブイリ事故後にユネスコが作成した放射能汚染資料の除染マニュアルの解説を担当しました。もう一つは『アーカイブ基礎資料集』です。

5月1日納品予定の『アーカイブ基礎資料集』は、大学での授業で使うことを念頭に、公文書館法や公文書管理法などの法令や行動規範をまとめました。どうぞご期待ください。

以上でご挨拶を締めくりたいと存じます。ご清聴ありがとうございました。

戸塚隆哉氏

(元情報科学技術協会(INFOSTA))

この度は名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。

130年前、二人のベルギー人が、世界から集めた文献を整理しようと、国際書誌学会(I



IB)を作って、国際十進分類法(UDC)を開発・採用。その後、国際ドクメンテーション連盟(FID)を経て、現在、UDCコンソーシアム(UDCC)が国際的な管理・普及をしております。

UDCは、図書などより詳細な内容の記事、論文などのように、詳細に限定された主題を持つ資料などの整理と検索に役立つように作られた多次元的検索の手段として発達したもので、系統的な階層のかつ多観点分類法です。標数(番号)の組み合わせ、多様な記号を駆使しての、多面的で精密な主題表現が可能であり、数字という万国共通の検索言語として、現在、世界130カ国、3万の図書館・情報センターで使用され、世界で最も使用されている分類法の一つです。

日本では、昭和の初期から使用され、本格的には、戦後の1950年のUDC協会(現在の情報科学技術協会・INFOSTA)創設後に多く使われるようになっていきます。

2002年に「UDC日本語CD・ROM版」(約6万項目)が発行されたのですが、2004年にINFOSTAのUDC事業からの撤退、同時にUDCCを退会したのに伴い、CD・ROM版も絶版となってしまいました。

以来、10年間、日本における分類表の管理と発行をする機関がなくなっていました。UDCを使っている機関から困ったとの声を聞いて、これはまずい、何とかしなければということで、UDC普及の一環として、UDCCからの「UDC Summary版」の翻訳版発行の呼びかけに応じて、日本語版作成を引き受けた次第です。

翻訳の作業には、INFOSTA内の「分類／シソーラス／Indexing部会」有志の協力を得て、2014年春に完成、UDCCに送付して、2014年9月からオンラインで見られるようになりました。

わずか2、600項目の要約版ではありますが、配架用のほか、図書館学教育・研究、情報の組織化や検索にかかわるいろいろな目的のためのデモ版として活用できます。

しかし、専門的な資料の分類には不足です。そこで、せめて1万項目程度の実用版(英語簡略版の翻訳)を出したい、と目下計画中です。個人レベルでの活動には限界がありますが、皆様のご理解とご支援・ご協力をいただいて、問題を解決してまいりたいと思っています。

最後に、今回の受賞を一層の励みとし、更なるUDCの発展に少なからず貢献できるよう努力してまいります。

参考文献

戸塚隆哉、光富健一、山崎久道、UDC日本語要約版の公開とUDCの最近の動向について、TP&Dフォーラムシリーズ整理技術・情報管理研究論集、201505、第24号、p.53-66.

俳句八句

山内 明子

母さんに逢へると姉は春空へ

ビアホール行くに寄り道銭湯ぞ

アメイジング・グレイス涼し尺八に

採寸にへこます腹や秋の昼

ニューヨーク行きの飛行機たくわん持ち

ボジョレーヌーボーようこそ未亡人会へ

みかんのすじ残らず取るや返事せず

何にでも加齢と云ふな風邪ひいても

川柳・戦時中

末吉 哲郎

戦時中学んだものは我慢だけ

校舎焼け機銃掃射に逃げ惑う

大空襲B29グラマン防空壕

特攻機出撃前に故郷舞う

ぜいたくは敵か素敵かスローガン

終戦の玉音放送空静か

九条をタフに護って平和の世

図書館は平和の砦がちりと

「月報」とその取扱い

―藤女子大学がスゴイ！理由

小川 千代子

「月報」、聞いたことがありますか？月報は年報、週報、日報などと同じく定期的に業務の遂行状況を報告する事務的書類、これが記録管理とアーカイブを専門とする筆者の基本理解です。しかし、子供の頃、父の書斎の床に、月報というタイトルの薄っぺらな印刷物が悲しげに転がっていた、ほのかな記憶があります。この月報は、多分なんとか全集というむづかしい本に挟み込まれてきていて、本体のこぼれ話などが割と気楽に綴られたもののようでした。難しそうな本はさておき、悲しげに床に横たわることした「月報」を拾い上げてパラパラ見たこともあった気がします。その印刷物の「月報」が、勤務先の藤女子大学図書館ではとても大切に取扱いされている、というお話を聞いてください。

手元の図書館用語辞典は月報を次のように説明しています。「月々の報告、またはそれを載せた印刷物。出版用語としては、全集や叢書など毎月逐次的に出される本に挟み込まれるリーフレット、またはパンフレット以外の印刷物のことを言う。著者の略歴、著者についての思い出やエピソードなどが載る。変わったところでは、毎月の月報に小説を連載し、全集の簡潔と同時に小説も完成するというものもある。図書館では、読み物として、あるいは調査の参考資料として使うため、表表紙を開いたところに貼り付ける例が多く見られる。また、月報だけをまとめて製本しているところもある。」

まず、勤務先ではない2つの図書館に出向き、月報の扱いを見てきました。どちらも、本体の表紙に月報は貼り付け処理されていました（写真右下）。これが一般的な処理だと用語辞典にも書いてありました。近隣の公共図書館で見かけた江戸川乱歩全集の表紙裏に貼り付けられた月報は、月報としてはかなりインパクトのある写真がその表紙を飾っているだけでなく、本体の表紙裏に用いられている紙もまた、レンガ色のなにより怪しげな模様がありました。これだけでもう、江戸川乱歩の世界が見えてくる…。なかなか雰囲気作りにも役立っているような印象がありました。

と、ここで、藤女子大学図書館では、月報だけをまとめて製本し、これを全集本体に付属する1冊として配架しています。これを見た他の図書館の方が、藤女子大学はスゴイ、と感想を述べられたそうです。ではなぜ、これがスゴイのか。LSFの皆様なら、そんなことは説明するまでもないのかもしれませんが、今一度、図書館の作業を思い出してください。図書館が受け入れた図書は、一冊ずつ図書館の図書とし



て使えるようにするための作業が施されます。

OPACへの入力と資産登録をすると、次に図書にはラベルが貼付されます。これが終わると、書架の所定の位置に配架されます。この作業は、スビードが求められます。雑誌の場合は、各号の入力作業の他、配架後一定の期間を経過すると合冊製本が行われます。こうした作業の流れの中で、毎月発行される全集の全冊が書架上に揃うまで、その全集に挟み込まれていた全集の月報だけを別に集めて、全号が揃ったら月報だけをまとめて製本を行い、さらには製本された月報合冊のOPAC入力以下の作業も行う。これが藤女子大学図書館での月報の取扱いです。

全集は数冊から数十冊発行されます。その発行終了まで、月報も発行され続けます。従って、月報が出揃うまでには数か月から数年という時間を要するのが普通です。月報を揃えるためには数か月から数年を要する息の長さがもとめられます。この息の長い作業が行われていることこそが、我が藤女子大の月報の扱いが「スゴイ」といわれる理由に違いありません。

なお、藤女子大学図書館のOPACを「月報」で検索したところ、64項目がヒットしました。内訳は「月報」というタイトルを含む図書、雑誌が32件、「月報」そのものに関する研究書3点、「月報」の目録1点、本稿が着眼した「製本された月報」が32点（図書・雑誌との重複5

点含）でした。

月報の目録からは、月報付きの全集が発行されている分野は文学芸術から科学・工学などなど、実に多岐にわたっていることが知られます。冒頭ご紹介した手元の図書館用語辞典の解説では、月報付きの全集は主として文学全集であるかのような印象を受けたのですが、これは私の読み間違いだったのかもしれませんが。

薄っぺらの印刷物というその形状故に、ともすれば失われやすい「月報」に、藤女子大学図書館では深い愛情を注ぎ、合冊製本の上本体全集とともに排架して、利用者の到来を待っているのです（写真左）。以上、身内自慢をお許し下さい。



（1）『最新 図書館用語大辞典』 図書館用語辞典編集委員会編、柏書房、2004年発行

「多死社会」時代の寄贈本作業

小泉 徹

高齢化社会とこれまで言われてきたが、現在は「終活」「多死社会」と言われ火葬場にも一週間以上たたないと入れない、そうである。暗いハナシでたいへん申し訳ないが、そうした世相も図書館に影響を与えないわけではない。

公共図書館にはあまり無い種類のユーザーだろうと思うが、大学図書館には卒業生利用者というグループがあり、「母校」という言葉も意外に死語となっていない。特に定年になってから自分の青春時代や学業にいそしんだ大学構内で古い時代の本を読み、図書館を利用しにくる卒業生も多い。団塊世代がもちろん多いわけで、そうした利用者から大学図書館に寄せられる意外な希望のひとつに「寄贈本」がある。

団塊の世代からの「寄贈本」の申し出を受けていつも感心するのは、1950年代60年代のいわゆる「良書」を数十年後まで大事に保管している方が多いことである。さらに感心するのは、英文学や独文学などを専攻して卒業し、

研究者や教員になったわけでもないのに、その後会社員となり海外出張した際などに購入したのだろうか、大学時代の専攻テーマに沿った洋書の専門書や、国内でも折にふれ購入した比較的最近の専門書などのまとまった冊数の学術書を寄贈したい、という申し出も多い。

それなりのレベルの本なので、古本屋に出せばかなりの値段にはなりますよ、と言うのだが、自分の蒐めた図書を散逸させたくない、学生や研究者にいつまでも利用してもらいたい、という希望を述べる人が多い。（いくらなら買いますか、などという人はまずいない。）なかには、曾祖父から伝わった古典籍を寄贈したいという場合もあり、教員にも依頼して鑑定団のようなことをしなければならぬこともある。

これまでも退職した教員や間際の教員からも同様な申し出は当然ある。かなりの重複調査や移送作業がともなうことになるし、予算化しにくい作業なので図書館としては必ずしも喜ばし

くない面もある。またさらに大きい話としては、個人文庫のような形で寄贈本をコレクションとして所蔵してもらえないか、というような依頼もある。大学図書館の購入する図書は金太郎館と言われたことがあるが、各大学図書館の特色を表すとすれば、そうした寄贈本コレクションの集積であるかもしれない。

そうした事を少し書いてみようかと思っていたのだが、折しも、最近逝去された関係者（図書館をよく利用していた方だが、教員でも図書館員でもない）のご遺志で、5,000万円という尋常でない額を図書費として寄贈したい、との申し出が大学にあったそうである。亡くなった学生のご遺族からといった図書費への献金はあったが、私にははじめての経験である。ある分野の専門書については蔵書もかなりお持ちだったらしい。そうした図書についてもまた依頼があるかもしれない。図書館は図書を購入する機関と思ってきたが、年齢を経ると、図書館とはまた違った面を持つ機関としても映るようになるらしい。

夏の盛りなので、そうした印象や感想を持つかもしれないが、図書館の書架に並ぶ本を見ていると、どこかワシントンで見たアーリントン墓地の墓標群を思い出す。

ドキュメンテーションアーカイブの設置を至急に

戸塚 隆哉

本図書館サポーターフォーラムのコアメンバーである太田泰弘氏は、「ドキュメンテーション」の日本における歴史を記録し、将来につなげるためには、「ドキュメンテーションアーカイブ」の設立を提案」を各方面に呼び掛けておられるが、残念ながら進展がない。

そのような中、ドキュメンテーション、図書館情報学界の功労者の方々の計報が相次ぐ。最近では、塚田孜氏（元東芝、INFOSTA（情報科学技術協会）永年会員、Doc. 懇（ドキュメンテーション懇談会）、神資研（神奈川県資料室研究会）などで活躍）の計報が伝えられた。所蔵しておられた資料はどうなるのだろうかと思おもむ。昔にさかのほれば、大塚明郎、中村幸雄、石原紘氏ら日本のドキュメンテーションの大御所の方々の持つておられた資料類はどうなったのだろうか。それでも、高橋正美氏、長山泰介氏らINFOSTAの重鎮の方々の蔵書整理をお手伝いし、ご存命中に処分の相談を受けたこ

とがある。一部は、図書館情報学を専攻する先生の研究室に寄贈され、研究に供されているのは幸いである。

最近でも、JICST（日本科学技術情報センター）設立に尽力され、草創期の活動を体験されたお一人から相談があり、とりあえず、私の元で預かることにした。その中には、「科学技術情報の全国的流通体制（NIST）の整備に関する中間報告」やV.StibicのPersonal Documentation for Professionals (1980) の原本（中村幸雄・塚田孜訳「情報管理のためのパーソナルドキュメンテーション入門」）そして内外各種シソーラス、分類表などが含まれる。

私自身も、在職していたNIPDOK（日本ドキュメンテーション協会）、INFOSTAで収集した貴重な資料―JICSTの設立および展開に深く関係したワインバーグ報告、NIST構想などのほか、クランフィールド報告書、UDC各国語版特にUDCの初版であるフラン

ス語版（1930）などが、さらにNIPDOK、INFOSTAがかかわった国際ドキュメンテーション連盟（FID）とのやり取りを伝える歴史的資料などが事務局の引つ越し・縮小に伴い知らないあいだに廃棄されたという苦い経験を持つ。それで、太田氏の提案する「アーカイブ」の設立に強く賛同する一人なのである。しかも、ことは急ぐのである。

最後に、本会の会長・山崎久道氏の近著『情報貧国ニッポン―課題と提言』（日外アソシエーツ、2015, 223p, 2200円）から左記のような警告と提言をされておられるので、引用させていただいて、シメとしたい。

「わが国には、ハードやモノに価値を認め、情報を軽視するという伝統的な「情報軽視」の社会通念があります」

「歴史に向き合うためには、歴史がきちん記録され、残され、国民の共有資産になつていなければなりません」

「すでに生産された情報の保存にはあまり関心がないように見えます。このことは文化や人間精神を軽視する風潮を生みだすかもしれない。私たちは今生きている「あかし」を100年後、1000年後に残すためにはどうしたら良いかを、真剣に考えなければならない時に直面しているのではないでしょうか」

上記のような提言のもと、私が所属するIN

F O S T A 「分類／シソーラス／Index i
n g」部会が、26年間300回開催を記念して
の「部会の歩み」(A4,176p.)をまとめ、メンバー
に配布された。26年300回の記録が残されて
いたことでまとめることができたのである。
ドキュメンテーションアーカイブの早急な設
立を望むのである。



情報貧国ニッポン～課題と提言

〈図書館サポートフォーラムシリーズ〉

山崎久道 著

四六判・230 頁

定価（本体 2,200 円＋税） 2015.5 刊

ISBN978-4-8169-2540-5

東京国立近代美術館の能

絵画と工芸と映画フィルムと

水谷 長志

本稿の由来 (i)

私と能、謡と金沢のことについては、本誌の六号に書いたことがあります (ii)。大学卒業後、間遠になった能ですが、『宝生流豆謡本』全三十六冊を入手したり、千駄ヶ谷の国立能楽堂が存外に職場から近いと分かったり、チケツトも国立能楽堂ならば取りやすいと気づいたりした頃から、ポチポチと年に数回、観能に足を運ぶようになりました。

そんな折、文化遺産オンライン (iii) の仕事で知己となった文化庁伝統文化課のT氏が国立能楽堂の調査資料係に異動になられて、常設の展示室と舞台動画のDVDも見られる図書室のある国立能楽堂の、その両方の担当係をされることになりました。

また、平成二十六年の二月に企画公演の『藤戸』を千駄ヶ谷で観たとき、たまたま、「ワキ謡で学ぶ能楽 世阿弥の修羅能 第二期 下掛宝生 謡曲入門短期集中講座」のチラシを手に

しました。私のもとの謡は、金沢のシテ方宝生

流の上掛ですが、夏目漱石、安倍能成、野上弥生子も愛好したという下宝には前から興味があったので、この短期講座に申し込んでみました。すると、すると、その主催のワキ方職分の御厨誠吾師は、なんと金沢大学宝生会の私のずっと下の後輩であったのでした。ワキ方として国立能楽堂の養成科を出られて、いまでは立派なワキ方の中堅になるうとしています。その後輩であり、師である御厨先生から、月に三度、四、五名ほどの仲間と一緒に、屋島、羽衣、紅葉狩、田村とお稽古を重ねています。

一年半くらい、このような能とのおつき合いを重ねていましたところ、国立能楽堂の宣伝編集係で毎月の公演パンフレット、月刊誌『国立能楽堂』の編集をされている方から頼まれて、寄稿させていただいたのが、この原稿です。毎号巻頭にある「随筆」のページに載ったわけですが、常の執筆者は著名な作家、学者、演劇人、

文化人などとして、私にはかなり敷居も高いし、なにを書いたものかと数日悩みましたが、本務先の美術館の中にある「能」を見直して書いてみました。

M L A 連携のことについて、最後に触れましたが、国立能楽堂に行かれたら舞台はもとより、ここにある展示室と図書室ものぞいてみて下さい。まさに M L A T (T は劇場) の連携が、髯髯としてあらわれてくるようですから。是非とも！。

i) 初出『国立能楽堂』第三八三号、平成二十七年七月、二・三頁。

ii) 「能をまた観る日に」本誌六号、平成二十一年九月、三十二・三十三頁。

iii) <http://bunkanijc.jp/>

戦後昭和二十七年に京橋で産声をあげた国立近代美術館は現在、皇居のかたわら、北の丸公園の竹橋に移転し東京国立近代美術館として三年前に六十周年を迎えた。上野の西洋美術館、京都の近代美術館と大阪の国際美術館、最新は六本木に新美術館という五つの国立美術館からなるのが独立行政法人国立美術館である。四つの国立博物館と東京と奈良の文化財研究所からなる国立文化財機構、国立能楽堂を擁す日本芸

術文化振興会と同じく、文化庁が所轄する独立行政法人である。

『弱法師』は、『下村』観山が絵によって舞った能である。」の一文で締めくくった清水玲子氏の「観山と能」は、近來稀な能と近代美術についての歴史実証的論考で出色であるが（『近代画説 明治美術学会誌』十二号所収、作品の所蔵は東京国立博物館）、能と近代文学ほどには、近代美術は能との縁の深い研究や資料の蓄積はまだない。しかしながら当館においても月岡耕漁の『能画大鑑』のような能画については、その長女の玉瀨の手になる『能寿加多』第貳輯「草紙洗」などを所蔵しているし、謡曲の物語、風景、情趣、心情に材を取った近代日本画の作品は少なくない。例えば、この春に大きな回顧展を開いた片岡球子の「石橋」に拠る『渴仰』があり、村上華岳の『日高河清姫図』（重文・「道成寺」に拠る）、観山の『太原御幸』、松岡映丘『屋島の義経』、中村正義『源平海絵巻』などの平家に題する作品は多い。五年前に開催した上村松園展では所蔵の『静』と並んで、多くの謡曲による名品『花がたみ』『楊貴妃』（ともに松伯美）、『焰』（東博・「葵上」に拠る）、『草紙洗小町』『序の舞』（重文・ともに東京藝大）、『砧』（山種美）などが並んで多くの人びとを惹きつけた。洋画に転じるとその数はぐっと少なくなるが、例えば中澤弘光の『かきつばた』は

外光派的描写で、薄様のドレープを纏うかのような女性の立ち姿は一見するとラファエロ前派のように見えるが、奥には確かに八橋が描かれているのであり、中澤流伊勢物語の解釈であることは確かである。

所蔵品ではないが、洋画と能との関係を思つて特に興味深いのは、青木繁と坂本繁二郎による能面を描いた多数の連作であり、須田国太郎の能舞台の夥しいスケッチである。前者は『青木繁と坂本繁二郎「能面」は語る』（竹藤寛）があり、青木が帝室博物館の伎楽面を執拗に描いたところからの連続と坂本との交感など、その不思議と魅力は尽きない。後者は須田の遺族から大阪大学の図書館に寄贈されて、今日、デジタルアーカイブとして閲覧可能になっている*。目録の作成は国立能楽堂でもしばしば曲目の解説に立たれる天野文雄先生によるものであり*、目録の冒頭に書かれているように、須田は京都三高時代から金剛流の謡曲を習い、初世金剛巖の芸に親炙して、デッサンも特に金剛能楽堂での舞台画が多い。一方、松園の『草紙洗小町』は、「昭和十二年の文展出品作で、これは金剛巖先生の能舞台姿から着想したものである」という（『青眉抄』）。須田はその前年の十一年に京都帝国大学文学部の講師となって「パロッコ絵画」を講義するとともに、京都帝大に美術部を創設して顧問に就いている。目録の昭和十一

年から十二年を見ると実に二十三番の舞台を描いて、内十三番が金剛能楽堂、内九番が巖のシテであった。日本画の松園と帝大講師の須田が京都金剛の能楽堂ですれ違っていた情景が目につくようである。

さて、竹橋の近代美術館から代官町の坂を上って北の丸公園を進むと旧近衛師団司令部庁舎の建物（重文）が工芸館となっていて、ここには、現代の匠による染織『能衣装唐織黒紅段』（喜多川平朗）や人形『江口』（林駒夫）などが待っている。

東京国立近代美術館のもう一つの組織でわが国唯一の国立の映画フィルム保存上映施設であるフィルムセンターが、国立近代美術館の誕生の地、中央区京橋に建っている。

ここには野口兼資の「羽衣」による『能の話』（丸山章治演出）など能の記録映画もあるが、能にちなんだ映画として『紅葉狩』を紹介しておこう。この約六分間のフィルム、実は歌舞伎の『紅葉狩』だが、明治三十二年の九代目市川団十郎の更科姫と五代目尾上菊五郎の平維茂が実写されたもので、映画フィルムとしては二〇〇九年に初の重要文化財の指定を受け、フィルムの不燃化からさらにデジタル復元版への試みなど、舞台の記録を残すための試行と努力が続いている。

須田のデッサンがデジタルアーカイブ化され

て誰もがその画像や情報に近づける時代になり、これまで同じ文化財、文化遺産の継承者でありながら、いささか疎遠であった博物館・美術館（ミュージアム）と図書館（ライブラリ）や文書館（アーカイブ）がインターネット空間を介して同じようにアクセスできて、その館の壁がずいぶんと低くなって、同じ主題、人物、作品、資料などを所蔵先のいかんを問わず一望できる時代を迎えている。その現象を「MLA連携」とも呼ぶのだが、そこに劇場（シアター）のTも加わって、「MLAT」の連携も十分に可能性が見えてきた。展示室と図書室をもつ千駄ヶ谷のここ国立能楽堂は、まさにその格好の実験場になりえるのではないだろうか。

* <http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/e-rare/suda/dessin.html>

** <http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBBOOK01/sudapdf>

（みづたに たけし 東京国立近代美術館 情報資料室長）



編集後記

「ふぉーらむ」12号をお送りします。

編集を進めている最中に台風18号・17号による影響で発生した記録的豪雨による、東日本全域の水害のニュースが飛び込んできました。

鬼怒川の決壊で、もっとも被害がひどかった茨城県常総市の図書館では、約3万冊もの本が水に浸かり、貴重な郷土資料にも大きな被害が出ているようです。

気候変動により台風、竜巻、大雪などが発生しやすくなっていることに加え、9月12日には東京湾で震度5弱の強い揺れを観測したり、御嶽山、口永良部島、阿蘇山で噴火が続くなど、日本列島の災害が多い時期に入りつつあるのだということに改めて実感せざるを得ません。

千年に一度と言われた東日本大震災から、約4年半。その間資料保存のあり方の検討や復旧・支援に取り組んできたライブラリアンやアーキビスト達のノウハウやネットワークが、今回の被災支援に活かされることを切に願います。

支援に役立つ情報があれば、事務局までお寄せいただければ幸いです。

(岩本)

東日本大震災が起こる数年前から日本の活火山が煙を吐き始めたという情報がありました。秋田駒ヶ岳とか、たおやかな名峰です。今のうちにこれとは思われる山塊は早く訪ねるのがベターかと思っています。

「大丈夫、大丈夫。私には無縁だわ」が一番危険です、との経験者たちの声がありますので注意して旅しましょう。

(森本)

ふぉーらむ 第12号

2015年9月30日発行

発行人 山崎久道

製作 森本浩介／岩本謙一／尾崎みやま／赤田麻衣子

発行所 図書館サポートフォーラム

〒143-8550 東京都大田区大森北1-23-8

日外アソシエーツ(株)内

TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845

http://www.nichigai.co.jp/lib_support/index.html

